琉球大学学術リポジトリ

多彩な南洋小説

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2016-08-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34689

多彩な南洋小説

仲程昌徳

はじめに

南洋群島には、数多くの島々が点在している。

矢内原忠雄の『南洋群島の研究』によると、その数は実に六二三にものぼる。そして「其の内訳はマリアナ群島一四（サイパン支庁管内）、カロリン群島五七七（ヤップ支庁管内八五、パラオ支庁管内一〇九、トラック支庁管内二四五、ポナペ支庁管内一三八）、マーシャル群島三二（ヤルート支庁管内）である」とされるが、「マーシャル群島の三十二島は更に八百六十余の礁島に分れるが故に、これら各礁島をそれぞれ一つの島嶼として通算するならば、南洋群島の総島嶼数は約一千五百に上る」と言う。

南洋群島は、そのように数多くの島嶼群からなるが、その面積はということになると「全島嶼の陸地面積を合しても僅かに二、一四九平方粁（約一四〇方里）、東京府の大さを有するに過ぎない」ばかりか「最大島たるポナペ島ですら三七五平方粁（二四方里）、之に次ぐパラオ本島（バベルダオブ島）は三七〇平方粁、何れも隠岐島に匹敵するに過ぎない。此の外稍々見るべきものはヤップ島（二一六平方粁）、サイパン島（一八五平方粁）、ロタ島（一二五平方粁）、クサイ島（一一六平方粁）、テニアン島（九八平方粁）であり、トラック諸島は最大の水曜島（旧名Tol）にして二三平方粁に過ぎず、春島（旧名Weta）二二平方粁、夏島（旧名Toloas）は九平方粁である。南洋庁所在地たるパラオ群島コロール島、燐鉱を以て有名なるアンガウル島、マーシャル群島の最大島たるヤルート島は、何れも僅かに八平方粁に過ぎない。その他の島嶼に至つては真に大海の一粟である」と言う。

矢内原は、そのように南洋群島の「土地」について記したあと「人口」についても触れ、昭和八年四月一日現在の「主要島別に日本人人口を見れば左の如くである」として、次のような表を掲げていた。

島名	全人口	中、日本人
サイパン島	一七、八〇八	一四、五八四
テニアン島	七、五五四	七、五三八
ロタ島	二、二五八	一、五四〇
ヤップ島	四、一九三	三五二
パラオ本島	三、六〇七	三四四
コロール島	三、〇二七	二、四三七
アンガウル島	九八四	二九八
トラック夏島	一、六二一	五五八
ポナペ島	六、六四八	一、三八五
ヤルート島	一、六八三	三九二

右の表から、矢内原は「サイパン、テニアン、ロタ、コロールの四島は、人口上寧ろ日本人を主とする社会となったことがわかる」といい、次に男女別、職業別の表を掲げ、その後に「本籍別」として、「在住邦人の本籍別人口を見るに、昭和八年四月一日現在邦人人口三〇、六七〇人中、沖縄県人は一七、五九八人であつて、五割七分を占める」と

いい、それに「鹿児島県人の多くは奄美大島の出身であるから」彼等を「沖縄県人に合するときは、南洋群島への移住者は大部分南方島嶼地方より出て居ることがわかる」という。そしてそれは「左の事情に基くものと思はれる」として、

第一、之等地方は人口過剰であり、殊に沖縄県に於ては経済的疲弊著しく、夙に海外移住が行はれて居たこと。

第二、季候風土の関係上之等地方よりの移民は南洋群島に於ける労働者殊に開墾的労働者として最も適当なること。

第三、沖縄県人は生活程度低く、且つ同郷的団結心強きによつて移住に有利なること。

といった三点を上げていた。

「南方島嶼地方」とりわけ沖縄からの南洋群島への移住者が多数に上ったのは、「経済的疲弊」による「海外移住」が常態化していたこと、「季候風土」の近似性、そして「同郷的団結心」が強固であるといった理由によると矢内原は指摘していた。そしてそれはまた、一時沖縄からの移民を大量募集した南洋興発社長松江春次が指摘していたことでもあった。

矢内原が上げていた昭和八年四月一日現在の「日本人人口」から四年後の昭和十二年四月一日現在の各支庁別の人口を見ると、次のようになっている。

支庁名	邦人（沖縄県人）	島民
サイパン	四二、六八八（二五、四八七）	四、一八〇

ヤップ	五三四（一三一）	五、七九三
パラオ	九、五三〇（三、七九〇）	六、五七八
トラック	二、六三〇（一、六八四）	一四、八九〇
ポナペ	三、一〇五（四九）	二、九三二
ヤルート	四九三（九四二）	一〇、〇六八

南洋群島在住者は、全府県にわたり「朝鮮、台湾、北海道、樺太に籍を有する者亦数百人に達して」いる中で、「沖縄県最とも多く、東京府、福島県、鹿児島県」がこれに次いでいると、大宜味朝徳は『南洋群島案内』で紹介していた。

それから二年後の昭和十四年末には「在留日本人七万七二五七人のうち、沖縄県出身者は四万五七〇一人を示し、全体の五九・二パーセントに相当した。また別の資料によると一九四二年（昭和十七年）には、在留日本人七万一六四七人のうち、沖縄県人が五万六九二七人を示し、全体の七九・五パーセントをしめた」という。

『昭和十七年版　南洋群島要覧　南洋庁』の「第四章　戸口」の「第一節　戸口の概要　一邦人」によると、「昭和十六年末現在で、男五二、三三一人、女三七、七四一人、計九〇、〇七二人に達した」とあり、「之等在留邦人を本籍地別に見れば、殆ど全府県に亘つてゐるが、就中沖縄県」からの移民が断然多いと指摘していた。沖縄県からの移民が相変わらず多かったことが分かるが、昭和十六年の在留日本人数九万〇七二人が、昭和十七年には七万一六四七人と減っているのは、「昭和十七年版　南洋群島要覧」か「別の資料」のいずれかに何らかのミスがあったのではないかと思われる。

ちなみに『昭和十八年版　南洋群島要覧　南洋庁』を見ると、十七年版まではあった「戸口」の章がなくなってい

て、人口動態は不明になる。その理由は、いわゆる南洋群島防衛に関する事項と関係していたに違いない。いずれにせよ、年毎に沖縄県出身者は増え続け、昭和十七年には在留日本人人口の大半を占めるほどになっていた。

沖縄から南洋群島への「大規模移民」が始まったのは大正十一年の五月下旬以降である。南洋興発株式会社は、「大正十一年早々沖縄県庁に移民募集を出願」し、五月下旬「純労働移民、即ち殆ど成年男子のみより成る移民五百四十名を乗せ、六月初旬サイパンに直航」させた。

南洋興発社長松江春次が「沖縄県から移民を採ることに決めた」のは、「次の様な諸点を参酌した」ことによるという。[2]

（イ）急速に多数の移民を求めるには、内地の中でも最も人口過剰に苦み、早くから海外思想が発達し、既にサイパン島にも相当の進出を行つて居た沖縄県人を最も適当としたこと。

（ロ）所要労力の主力を占むる甘蔗栽培の農夫としては、甘蔗は極めて栽培の容易な作物ではあるが、尚ほ全く甘蔗を見たこともない地方の人々よりは、幼時から甘蔗に親しみを持つて居る沖縄県を選ぶことが最も無難と考へたこと。

（ハ）人口の密度諸県の首位たる沖縄県は、之を養ふに足る産業を欠き、久しく蘇鉄地獄とさへ謂はるゝ惨状に沈淪して居たのであるから、其の過剰人口の一部を余裕ある南洋に移すことは、国策上極めて有意義と考へたこと。

矢内原忠雄が指摘していたこととほぼ重なる理由が上げられているが、沖縄からの南洋移民は、南洋興発の「移民

募集」によって、勢いを増していったといっていいし、沖縄からの移民の殆どが、南洋興発と関わる仕事についたといっていいだろう。

昭和八年現在における「南洋興発会社の各種事業に従事する社員労働者小作人」の数について「七、一一四人、家族数を加ふる時は約一万五千人に達し、南洋群島の全日本人人口の一半を占める。而かも同社最近の事業拡張に伴ひ移民数も累増し、昭和九年九月現在に於て八、一一五人、家族数を合すれば約一万七千人となり、尚渡航移民予定数四一〇名を数えた。之等直接の従業員及び家族の外、その生活に関連する各種職業の社外従業者を合すれば、直接間接この会社の事業に基きて移住せる人口は更に多数に上ること明かである」と矢内原が書いているように、時代が下るに従って、南洋興発関係者が増えていったことが分かる。

大宜味は「従来南洋群島の移民と云へば興発会社の移民を称してゐたもので同社の製糖業を始め澱粉、燐鉱、水産等約五万人に近き移住者を南洋群島に招致してゐるのである[3]」という。南洋興発は、製糖業だけでなく、他の職種でも数多くの移民を抱えていて、移民と言うと「興発会社の移民」と言われるほどであったが、中には当然そうではない移民たちもいた。

1、「風変わり」な渡航者―「テニアンの瞳」

南洋群島を舞台にして書かれた沖縄の書き手たちの作品は、それほど沢山あるというわけではない。沖縄から南洋への移民が多かったことからすれば、南洋に取材した作品が数多くあって不思議ではないが、意外と少ないのである。その数少ない作品の一つに儀間比呂志　文／絵の『南洋いくさ物語　テニアンの瞳』[4]があった。

儀間の作品は「昭和十五年の春、テニアン島の沖合に停泊したサイパン丸から、大勢の乗客とともに、風変わりな

少年がひとり島に上陸してきました」と始まる。

大勢の移民とともにテニアン島に上陸した少年が「風変わり」であったのは、「絵が好きで、沖縄から南洋を描きにやってきたようで」あったことによる。少年は十六歳で、名前を達治といった。

作品は、その「風変わりな少年」達治の島での生活を描いた前編と、少年が島から去った後の島での戦争とを描いた後編の二部に分けられる。いわゆる戦前編と戦争編との組み合わせからなるが、戦前編は、次のようになっていた。

テニアンで上陸した達治少年は、港の近くの旅館に旅装を解き、「スケッチブックを片手に島の繁華街」をぶらつく。周囲五〇キロほどの小さい島を「五、六日」かけて見回った少年は、タガ遺跡の前で、夕陽をながめていて、ホームシックに襲われる。そこに「沖縄のサンシン（楽器）と太鼓の音が、風に乗って聞こえて」くる。少年は、その音にさそわれるようにして歩き出し、気がつくと芝居小屋の客席に座っていた。

芝居が終わったところで、少年は座長を訪ねて、入団を申し込む。座長は、少年に「役者には無理だが、絵が描けるなら、大道具を手伝いなさい」といい、入団を許可する。次の日から一座に住み込むことを許された少年は、劇の背景画の作成、舞台の幕引きなどを手伝うことになる。

少年が入団したテニアンの一座は、ときどき巡業に出た。ロタ島への巡業に同行した少年は、そこで、彫刻家に出会う。少年は、彼に、自分も「美術家」になりたいといってスケッチブックをみせる。彫刻家は少年に「絵画の基本」を教える。テニアン島にもどって、しばらくすると、ロタ島で出会った彫刻家が芝居を楽しそうにみているのに驚く。芝居が終わったあと、少年は、彼に「沖縄語」がわかるのかと聞く。彼は、言葉は分からないが、「感じ」るものがあるという。そして「沖縄文化のすばらしさ」を指摘し、「芸術を志すなら、自分の民族のたましいを大事にしなさい」と説く。

少年がロタ島で出会った彫刻家は杉浦佐助。少年は、座長の許しを得て、テニアンのカロリナス台地に居を移していた杉浦の内弟子となって住み込み、杉浦から、杉浦のために土方久功が用いていたテキストを使って「世界文化史と美術史」を学んでいく。

少年がテニアンに上陸してから三年目の一九四三年、南洋庁は、戦況の悪化により老幼子女に「内地疎開」を奨励するとともに、「十六歳から六十歳までの男子は戦闘要員として、島に残るように」との布令を出す。少年には「徴兵検査に帰れ」という電報が沖縄から届く。少年は迷い、杉浦に相談する。杉浦は少年に「戦況は日本が負けそうだ。テニアンもあぶない。帰郷しなさい。生きて絵を描くんだよ」という。少年は、テニアンを去ることを決意し、無事沖縄に戻る。

『テニアンの瞳』前編は、そのように達治少年が、テニアンに上陸し、沖縄芝居の雑用係となり、巡業に出たところで、彫刻家・杉浦佐助と出会い、知遇を得て絵画を学んでいるところへ、徴兵検査の通知が届き、テニアンを引き揚げなければならなくなるところまでを書いていた。

儀間比呂志は、一九九四年五月『版画集　儀間比呂志の沖縄』を刊行していて、そこで次のように書いている。

昭和十五年春、十七歳のとき、私は故郷・沖縄を出奔した。時代は太平洋戦争勃発近く、明治の琉球処分以来、日本政府がとり続けていた沖縄県民にたいする皇民化政策は、ますます熾烈を極め、方言を喋るな！裸足(はだし)で歩くな！　琉歌をうたうな！　おまけに親父にまで、好きで描いていた絵を「この非常時に」と怒鳴られた。そんな蛮声に満ちた沖縄が、嫌になったのかもしれない。

何処へ行くと、当てはなかったが、とにかく那覇港から大和（やまと）行きの汽船にのった。船には、内南洋方面に呼び寄せ移民するという読谷村の人たちが、家族ぐるみでのりこんでいた。その人たちから「南洋は美しいところ。それに、仕事口も多く、暮らし良いそうよ」という話を聞いて、神戸から横浜と、船を乗り継いで、十五日目に、共に下船したところが、テニアン島だったのである。

儀間の作品『テニアンの瞳』は、次のように書き出されていた。

昭和十五年の春、テニアン島の沖合に停泊したサイパン丸から、大勢の乗客とともに、風変わりな少年がひとり島に上陸してきました。名を達治と呼び、その年十六歳、絵が好きで、沖縄から南洋を描きにやってきたようです。テニアン島には、たくさんの沖縄県民が移り住んでいました。船で親しくなった光子さん親子も迎えにきたご主人のカレーター（牛車）に乗って、別れていきました。

『テニアンの瞳』前編は、作者儀間比呂志の実体験を下敷きにして書かれていたことがよくわかるものとなっている。儀間の実体験を踏まえて書かれた作品が、特異な作品になっているのは、南洋へ渡ったものたちのなかには「風変わりな少年」のような渡航者もいたといったことを取りあげていた点にあった。南洋移民といえば、すぐに南洋興発傘下の職種についた移民たちを想像させがちだが、そうではない者たちもなかにはいたのである。

「風変わり」な少年の登場は、さらに「風変わりな」南洋移住者たちのいたことを際だたせるものとなっていた。その一つが、達治少年を内弟子にした杉浦佐助のような移住者である。

杉浦は、一八九七年、現愛知県蒲生郡市に生まれ、小学校を出ただけで、宮細工の棟梁に弟子入りし、後、南洋に渡り、南洋庁の下で大工として働いていて、彫刻家への志望が高じていた矢先、土方久功のことを知り、土方を訪ね、弟子入りを願い出る。土方は杉浦の申し出にとまどうが、島内調査に通訳が必要だったこともあり、交換条件をつけて島の言葉に明るかった杉浦との協同生活を開始する。

一九三八年、杉浦は土方とともに日本に戻り、銀座のギャラリーで個展を開催する。目録には高村光太郎、川路柳虹の推薦文が寄せられ、当時の代表的な美術雑誌『美之国』でも特集号を組むほどの反響を呼ぶ。展覧会のあと杉浦は、コロール島に戻る土方と別れて、ヤップ島へ渡り、ヤップ島からロタ島、そしてテニアン島に移っていく。

杉浦が弟子入りを望み、協同生活をするようになる土方久功は、一九〇〇年東京に生まれ、学習院を経て美校の彫刻科に進み、ゴーギャン等の影響を受け、一九二九年南洋パラオへ渡る。彫刻や絵を描くとともに、パラオやサタワル島の民族、民俗への関心を深め、調査、報告を行い、斯界の研究者から注目を浴びた。[5]

儀間の作品には、土方に関する直接的な記述は見られないが、杉浦の登場は、必然的に土方久功を呼び起こすものがあった。

『テニアンの瞳』は、「風変わりな」少年の登場とともに、杉浦や土方といった彫刻家たちがいたことを教えるものとなっていて、南洋群島には、様々な移住者たちがいたことが分かるのだが、そこにはさらに「風変わり」な移住者たちも登場していた。少年が入団した沖縄芝居の一座である。

「テニアンの青春――十七歳の出奔」には、次のよう文章が見られた。

テニアン島には、一万人以上の県人が住んでいる。〝沖縄県人の行くところ、歌、三味線あり〟で、そこに

常設の郷土劇場があっても、不思議ではなかった。

その球陽座という定員三百名ぐらいの小さな劇場は、異郷に「ふるさと」を求める人々で膨れあがっていた。人びとは、役者がウチナーグチ（沖縄方言）で演ずる一挙手一投足に泣き、笑い、喝采し、フィフィと指笛を鳴らす。私の目頭も熱くなりっぱなしだった。なかでも、座長・渡嘉敷守良の舞う「諸屯」は圧巻。長身に、色鮮やかな紅型衣裳をまとい、華麗に空間を切る名優の絶妙な古典女踊りは、妖しいまでに美しく、私たちを陶然とさせた。

この時代、私たちは日本の支配者や、その追随者たちから、沖縄土着の芸能は劣悪文化と教えこまれ、信じさせられたが、それが、とんでもないまやかしであったかを、私は、ここ南洋の小島で、身をもって知ることができた。

儀間は、南洋にきて沖縄の伝統芸能の素晴らしさを知ることになるのである。

儀間を魅了した渡嘉敷が南洋に渡ったのは、「テニアン島の劇場経営主具志幸助氏」が「電報で役者三人招聘を依頼してきた」ことによる[6]。渡嘉敷の名は、沖縄だけでなく南洋にまで轟きわたっていたのである。

具志の依頼を受けた渡嘉敷は「当時としては悪い待遇でもなかったから、安慶田賢明、小那覇義勇の両人を連れ、昭和七年四月那覇出発、横浜経由で五月六日テニアンに到着、朝日劇場という小屋で上演した」という。そして「二ケ年間テニアン、サイパン間を往来して興行していたが、最初は経営主も二、三千円儲け、サイパンの南座も手に入れたけれども、商売上の失敗でテニアンの劇場は手放すことになったので、それから後は小劇場ではあるが、私が譲り受けて経営すること」になったという。

渡嘉敷守良は、南洋での巡業について次のように回想していた。

今でも思い出してゾッとすることは、テニアンから七時間位の航程で行けるロタ島に航海中、ひどい暴風雨に逢い、二十馬力の小発動機船のこととて、狂瀾怒涛に木の葉のように翻弄され、危く一命をなくする程の海難に遭った事がある。パラオ島では一ケ月ばかり興行してアンガールに渡り、二日間会社従業員の慰安演芸会を買切で催し、再びパラオに帰り、一週間後本拠テニアンに帰ったのである。

昭和七年南洋に渡った渡嘉敷は、昭和十七年十一月の末南洋を引き揚げているが、その間昭和十一年に一度沖縄に戻っている他は、テニアンを本拠地にして、南洋の島々を興行してまわっていたのである。

南洋に芝居小屋が設けられ、役者たちが沖縄から呼ばれ、常駐し興業をうつようになるのは昭和六年ごろからである。昭和六年七月十一日付け「大阪朝日新聞付録九州朝日鹿児島沖縄版」は「琉球劇が南洋進出　渡航県民の慰安のため」の見出しで、次のような記事を出していた。

〔那覇〕南洋サイパン地方には県人約一万数千名がゐるが何ら県人の娯楽機関なきところより今回南ガラパン街に琉球劇上場専門の劇場が県人会の手によつて八月中に（以下二行判読不能）依頼して来た、そこで斡旋者は過般ゴタ〳〵のあつた当市西本町の旭劇場の元幹部だつた平良、島袋、親泊その他を筆頭に若手俳優連を加へて一座を組織しいよ〳〵来る十六日横浜出帆の便船でサイパン島に向け鹿島だつことになつたが大正劇場のハワイ渡航と相まつて近来琉球劇の海外興行はやうやく目立つて来た

記事に名前の出ている「平良、島袋、親泊」は、平良良松、島袋光裕、親泊興照であったことが島袋光裕の『石扇回想録』からわかる。『石扇回想録』には、次のように書かれている。

たしか昭和七年と覚えているが私は平良良松、我如古弥栄、親泊興照、翁長小次郎氏らと組んで南洋サイパンへ渡ることとなった。サイパンに「南洋」(「南座」の誤植—引用者)という劇場ができ、そのこけら落としのための招待興業で、話を持ちかけてきたのは仲本興正氏であった。

むこうでは割に好評で、在留をすすめる県人もいたが、やはり私たちの心は沖縄にあったので、すぐに帰ってきた。

私たちが南洋で公演して帰ったすぐあとに、渡嘉敷守良、伊良波尹吉氏らもテニアンの「朝日座」というところで興行している。

「大阪朝日新聞付録九州朝日鹿児島沖縄版」や『石扇回想録』等からそれとなく読み取れるのは、沖縄の南洋移民たちにも、ようやく生活に余裕が出始めていたということである。サイパン、テニアンに沖縄芝居の劇場が出来、沖縄から役者たちが招待されてくるだけでなく、常駐し、そして各島への巡業が行われるようになったのは、南洋移民の生活の向上がなくてはかなわぬことだったと言えるからである。[7]

南洋に劇場ができたことで、やがて、役者たちの往来だけでなく南洋興発の移民募集に応じて渡航しながら「南座」で地謡として活躍するようになる「風変わり」な民謡歌手も出てくるようになる。[8]

2、「異端者」の渡航

南洋には、画家志望者の渡航や、芝居の役者の渡航といった「風変わり」な渡航者たちだけでなく、さらなる「異端」の渡航者もいた。

金城正明の「少年と異端者」[9]は、題名通り「少年」と「異端者」との交流を描いたものである。作品は、その「異端者」の紹介からはじまる。

「ハーモウ」とは、沖縄の方言で歯が欠けているという意味である。

ハーモウ太良が現れるようになったのは、善吉が小学校二年の頃だが、言葉を交すようになったのは五年に進級した頃からである。

学校へ往来する途中に「千本木」があって、その木陰は、生徒たちの休憩場所になっていた。五年に進級したばかりの善吉がそこに休んでいると、「肩まで伸びている頭髪、口の回りの長い髭、それに一見鋭いような細い眼。人に出会っても挨拶をせず、いつも前を見詰めて考え込んでいる表情をして」いる「狂り者と言われていた」太良がいつの間にか側にきて、震えおののく善吉に声をかける。「容姿は異状だが、優しい眼付きや落着いた話振りから見るに、太良は思っていたような恐ろしい人ではないようだ」と思った善吉は、太良に「教科書の予想問題を質問してみたら、先生よりも上手に教えてくれた」。そして太良は善吉にとって「先生よりも有難い存在」になっていく。

善吉の両親は、太良を「極道者」だという。彼の前歯が欠けているのは、「大学生時代に社会主義に被れ、警察に逮捕されたのが原因」だといい、「学問は大切だが、ほどほどに。太良のように秀り者になると、逆に狂り者になっ

て、親兄弟や世間様に迷惑をかけるようになる」と諭す。もちろんそれは「善吉の進学」に釘を差すためでもあったが、善吉は、親の意に反し「だんだん太良に心酔して」いく。

「千本木」の樹上の茂みの中には板が敷かれていて、善吉と太良との休憩場所になっていた。そこである日、善吉は太良に、大学を中退したことや、前歯の折れた理由を聞く。太良は、善吉を無言で見詰め、「仕方がないという風に一息深く」吸い、「人間は、みんな平等に生きる権利がある。社会の凡ての物は平等に分ち合わねばならない」と言葉を強め、それから低い声で、「今の日本は、あまりにも貧富の差があり過ぎる。戦争で国の為に死ぬのは、農民や労働者である。生産や建設に汗を流すのも、国民の九割をしめる彼らだ。彼らは国の土台である。ところが、その大切な土台である人々は、息子や娘を売らねばならないほど苦しい生活をしているのだよ。農民や労働者の大半は、特権階級が飼っている犬よりも劣る生活をしているのだぜ。そんなバカなことがあっていいかね」と話し出す。

善吉は太良の話が理解できたわけではなかったが、善吉のこころに太良を尊敬する念が深まっていく。それは彼が、周囲から見られているような人間とは全く異なること、何よりも、彼の学習指導のおかげで、予習がうまくいっていたことによるが、彼等の蜜月にやがて終わりがくる。

千本木の木陰で、その日高等科を卒業したばかりの良ちゃんと春ちゃんの二人が休んでいるとはしらずに、善吉は、木の上から小尿をする。それが、二人の髪の毛にかかってしまう。二人は悲鳴をあげながら逃げていく。翌日、善吉は、甘蔗の刈り取りに現れた二人を見るが、二人とも昨日のことなど気にもしていない様子なので、ほっと胸をなでおろす。

新学期がはじまり、学校に行ってみると「狂り者の太良が、千本木の上から女の子に小便を掛けた」といった噂が学校中に広まっていた。善吉は、悩む。あれこれ考えた末「躊躇している場合」ではないと、春ちゃんに会い、小便

をしたのは自分だと白状する。春ちゃんは、「真実を誰にも言うな」と口止めし、「あんなバカは、あれでいいのよ」と言い、「さあ、用事が済んだら帰りなさい」と善吉を追い返す。

善吉は、太良が「狂り者で他人に迷惑を掛け、郷土の恥になる」ということで、「酷い烙印を押され、既に故郷に強制送還されていた」ことを知る。その理由は「狂人や生活不能者は、県人会の手で郷里に送還するしきたりになっていた」ことによる。

「狂り者」だとして送還された「異端者」にはモデルがあった。金城はそのことについて、次のように書いている。

> 通学路の途中の線路脇に千本木が一本立っていた。木蔭は学校帰りの生徒の休み場になっていた。千本木についてはいろいろな思い出がある。その中でも記憶に鮮烈に残っているのは、浮浪者ハーモウマツーのことである。マツーについては拙著「サイパンの桜」の中の「少年と異端者」の中にハーモウ太良のモデルとして登場させてある。その他に、千本木の上から下で休んでいる女生徒に小便を掛けたりなどの悪さをして国吉先生にぶん殴られたことなど、千本木についての思い出は数え上げればキリがない。

「ハーモウ太良」にはそのように「浮浪者ハーモウマツー」といったモデルがあったのだが、もちろん「ハーモウ太良」は、「浮浪者ハーモウマツー」であるわけではなく、作者の生み出した人物であった。

少年と「ハーモウ太良」の別離は、思いも寄らない「ハーモウ太良」の強制送還といったかたちで幕を閉じることになるが、彼等が出会い、別れたのは何年頃だったのだろうか。作品には「ハーモウ太良が現れるようになったのは、善吉が小学校二年の頃だが、言葉を交すようになったのは五年に進級した頃からである」とあって、二人の出会いは、

少年が「小学校二年の頃」だということはわかるが、それが何年であったかは明示されてない。

金城は「チャッチャ小学校の思い出」の中で、「私は昭和七年にチャッチャ尋常高等小学校に入学し、昭和十五年高等科卒業後サイパン実業高校に入学した」[10]と書いていた。それに従えば、少年と「ハーモウ太良」とが出会ったのは昭和八年前後であったといえるが、その頃、サイパンには、すでに「ハーモウ太良」のように「世の中を変えようと同志と画策し、警察に逮捕され」「取り調べの際に拷問を受けた」経験を有するものがいた。

野村進の『日本領サイパン島の一万日』は、「南洋随一の料亭」と言われた「よか楼」を中心にしてその関係者について書いた労作であるが、そこに登場する山崎桂男が、まさにそういう人物であった。

『日本領サイパン島の一万日』にはまた、大正末から昭和初期にかけて「まだ彩帆閣が全盛のころで、離れには食客が常時寄宿していた。袴姿の書生風が多く、『実は内地で官憲に追われ、ここまで逃げてきたのだ』と声を潜める者もいた。療養中だった清子は、退屈しのぎに彼らとよくおしゃべりをし、日本や世界の社会主義運動の潮流を聞きかじった」という記述が見られる。「彩帆閣」は「よか楼」の前身、清子は「よか楼」の娘であるが、その清子が夫として迎えることになる山崎桂男は「一九三三年二月に、日本共産党員として治安維持法違反で山県地裁に送検され」、「先革の部分をはずした竹刀で滅多打ちにされ、真冬に冷水を浴びせられ」るといった、特高による峻烈を極めた拷問を受け転向、将来に希望を失いかけていた時、病気療養のためサイパンから山形に帰っていた清子と出会い、昭和九年（一九三四年）五月初旬、サイパンに渡ってきた人物であった。

山崎が、サイパンにやってきた前年の昭和八年（一九三三年）三月、日本は国際連盟から脱退、それに伴い「南洋群島の、国防上の重大性」が強調され、映画「海の生命線」が制作、上映され、反響を呼び、同名の歌がガラパンの町にも流れるようになり、昭和一〇年（一九三五年）一二月には、「御真影」が、サイパン尋常小学校に届き、奉安

殿に奉納される。その頃から在郷軍人会の活動が盛んになり、昭和一一年（一九三六年）八月には「広田弘毅内閣のもとで『国策の基準』が新たに定められ、大陸と南方の双方に進出する『南北併進論』が打ち出された」ことで「南洋群島の中でも軍事的要衝に位置するサイパン島は、注目の的となり、海軍基地の整備が急がれた」ばかりでなく、「一九三六、七年ごろからサイパン住民に対する締めつけは、様々な面で厳しくなりつつあった」という。[11]

「ハーモウ太良」が、「強制送還」される頃から、南洋群島も戦時色が濃くなっていき、やがて戦争に飲み込まれていくことになる。

昭和十八年版『南洋群島要覧』は、これまでの「警察」の章にはなかった「治安状況」を設け、次のように報じていた。

昭和八年三月我が国は国際連盟を脱退し、南洋群島は帝国の構成部分として不可分一体たるを宣言し、毅然として群島の位置を顕照する所あつたが、在住官民は良く道聴途説を排して群島開発の使命達成に邁進し、島民も亦些も動揺の色なく皇民化の一途を辿りつゝあつたが、更に支那事変を契機として群島の重要性益々加重せられ、我が国唯一の純熱帯地たる群島の資源開発は頓に活況を呈し、諸種の産業は一段と躍進を遂ぐるに至つたが、偶々紀元二千六百年紀元の佳節に当り官弊大社南洋神社創立の旨仰せ出され、群島在住民は愈々茲に尊崇敬神の中心を得、万世不易の皇土たるの信念を固め銃後国民の決意厳として南方開発に尽瘁しつゝあり、又大政翼賛会の発足と之が活発なる運動の展開に依り民心は挙げて聖戦完遂の一点に凝集せられ、在住民の総力を挙げて奉公の至誠を效しつゝあり、殊に昭和十六年十二月八日米英に対して宣戦の大詔煥発せられ当日午前八時全管下に防空の実施を下令すると共に警戒警報を発令し、群島一斉に戦時体制に移行したが、民

心極めて平静にして思想言論、防諜、流言蜚語等に関する事犯挙ぐべきものなきも、土地柄防諜は最も緊要なる為官民相協力して遺憾なきを期してゐる。

『南洋群島要覧』は、そのように、昭和八年以降の群島の動向を記述していくなかで、最後に「思想言論、防諜、流言蜚語等に関する事犯」はなかったとわざわざ書き記していたが、そのような「事犯」はなかったというよりも、「思想言論」等に問題ありとされた人物は、すぐに「強制送還」といったかたちで、島から追放されたのではなかろうか。

「ハーモウ太良」は、「郷土（沖縄）の恥」ということで「強制送還」されていたが、彼の送還はまちがいなく「思想言論」に問題があったことによっていたはずである。

「少年と異端者」は、思想的な問題によって日本・沖縄におれなくなり南洋へ逃れてきたのが、そこにもいることを許されず、強制的にまた沖縄へ送還された一人物を造形していたということで、南洋小説のなかでは異彩を放つ作品になっていた。

3、島人たちの登場　「パラオの青い空」

儀間の『テニアンの瞳』も金城の「少年と異端者」も、それぞれに異色の人物が登場していた。そしてそれらは、良く知られている移民像とは全く異なる移民たちを扱っていたことで、特異な作品と呼べるものになっていたが、特異な作品という点では、「パラオの青い空」[12]もそうだった。

「パラオの青い空」が特異な作品になっているのは、パラオの「島民」たちが登場してくるという点にあった。南洋を背景にした作品に、南洋の「島民」が登場して来るのは当然だといえないこともないが、『テニアンの瞳』には

全く出てこない。「少年と異端者」にも、「善吉の友だちの一人に島民の子がいる」として、公学校五年生の少年が「一人」だけ「遊び疲れると、メリケン松の林で寝ころんで、絵本を読んだ」といった程度にしか出てこなかった。「パラオの青い空」は、それだけに他の南洋作品とは、大きく異なるものがあった。しかも、作品に登場してくる島民たちが、遠景としてではなく、移住者たちの生活に、大きな影を落とす存在として登場してくるのである。

作品は、「昭和十六年から四年間」夫と共に過ごした土地・パラオへ、「私」が、三人の子供たちに連れられて再訪するという筋立てになるものであるが、それは、かつて住んでいた土地が懐かしくて再訪するといったのではなかった。その再訪は、「六年ほど前から」老人施設に入っていて「呆けの兆候」が見られる母親の「呆けを治すため」に行われたものであった。子供たちは、母親の「記憶が、戻るのではないかと言って、パラオへ行くことを決めた」のである。そして子供たちのその試みは、母親の「呆けを治す」ことは出来なかったものの、「記憶」を取りもどさせたという点では、十分に成功したといっていいものであった。

「パラオの青い空」が、他の南洋作品と異なるものになっているのは、その「記憶」が呼び起こした出来事にあった。

あんた、パラオに来ましたよ。私たちの青春が詰まった島パラオだよ。息子の信一が眠る島、たくさんの思い出が残る島、パラオだよ。戦後六十年、やっと、来たんだ・・・。あんたが、もう一度行ってみようか、とは決して誘ってくれなかった島パラオに、私は来たんだよ・・・。

「パラオの青い空」は、そのように始まる。

「私」がパラオに来られたのは「子供たち」のおかげであり、その子供たちは「あんたの面影を残している」だけ

でなく、「優しい心も、そっくりだ」といった言葉がその後にあり、続いて、唐突としかいいようのないかたちで、次のような文章が現れる。

あんたが死んでから、もう二十年余になる・・・。どうしてあんたは自殺なんかしたのか、私には、まだ理由が分からない。あんまり突然だったんで、私は、すっかり取り乱してしまったんだ。だって、そうでしょう。一緒に四十年近くも暮らしてきたのに、あんたが抱えていた闇を、私は見抜くことが出来なかったんだからね。本当に情けないよ・・・。

「あんた」が、「もう一度行ってみようか、とは決して誘ってくれなかった」のはなぜか。そして「あんた」が突然「自殺」してしまったのはどういう理由によるのか。「パラオの青い空」は、そのことをめぐって、「私」と「あんた」とが互いに秘めていた「闇」を浮かびあげていくが、その「闇」と関わって登場してくるのがパラオの島民たちであり、それがこの作品を特異なものにしていた。

「あんた」と「私」が、パラオに渡ったのは昭和十六年の夏。私が二十四歳であんたが二十六歳のときであった。「国民学校の先生として、皆から慕われていた」あんたが、パラオ行きを決断したのは、あんたの兄さんが鰹業で財をなし、手伝って欲しいという手紙が何度かあったことにもよるが、パラオ移住後は、兄の事業と全く関係のない公学校の先生になる。

あんたが勧めるようになった「公学校」とは、「島民に対する普通教育機関」[13]で、本科三年制、さらに向学の志あるものの為に「所在地の公学校に修業年限二ケ年の補修科を併置して実際生活に一層必要な智識技能」を授けたとこ

ろである。公学校の「教科目は、修身、国語、算術、地理（補修科）、理科、図画、唱歌、体操、手工、農業、家事（女）であるが、特に徳育、国語の普及、勤労精神の啓培に重点」[14]が置かれたという。

昭和十四年パラオの公学校数は五校、その一つコロール公学校の職員数をみると八名（邦人七、島民一）となっている。[15]「あんた」が勤めるようになった頃も、ほぼ同じ規模で、大差なかったといっていいだろう。

「あんた」が「特に現地の人々からは、大きな尊敬と信頼を集めていた」というのも、「公学校」の先生であったことと関係していただろうし、また「公学校の教師は、ほとんどヤマトの人であったから、あんたが、沖縄人社会（ウチナーンチュ）とヤマトンチュ社会との間に入って貴重な役割を果たしてくれていることも」間違いなかったであろう。さらには「現地で生活している沖縄の人々からも、何かと頼りに」されていたというのもそのとおりであろう。「公学校」の先生は、「国民学校」の先生と同等とは見られていなかったにせよ、「先生」であることにかわりはなかったし、何よりもあんたは「島民に対する普通教育機関」にいたのだから。

パラオでは「あんた」と「私」のために官舎が用意されていて、「テークとサムエルという二人のボーイも官費で雇われていて」「それこそ大名暮らし」で、幸せそのものであった。しかし、あんたが「南洋庁駐在の役人や軍人の訪問を受ける」ようになり、彼等とともにコロール島の中心街にたちならぶ「料亭や小料理屋」に足を運ぶようになって、その生活に陰が差し始める。ある日、私は、サムエルから「あんたが、ルビーという女と親しくなり、密かに会っている」ということを告げられる。私があんたにそのことを尋ねると、あんたは、否定した。私は、サムエルの話を彼の妄想だと考え、あんたの言葉を信じたが、あんたが、サムエルを辞めさせたのにショックを受ける。あんたは、その理由を言わなかったが、そのことを境に、あんたは変わり始めただけでなく、あんたのまわりには「ますます得体の知れない商売人や、ぎらついた目をした軍人たちが多くなって」いき、帰りが遅いときには「Yシャツに女

の匂い」を漂わすようになる。
サムエルのこともルビーのことも忘れようとしていたそのころ、子供が生まれ、サムエルにかわってオムテロウがやってくる。彼も、サムエルに劣らず「無邪気で明るい性格をして」いて、上の二人の子供たちを喜ばせただけでなく、私の慰めにもなっていく。
そして、生まれた子が、すくすくと育っていく姿を目にして私の「あんたに対するわだかまりも、不安も、みんな消し飛んでいく」ようで、子供の「笑い声は、私の心を慰めてくれた」のだが、その子供が、海で溺れ死んでしまう。
子供の死をテークとオムテロウは、自分たちのせいではないかと悔やむ。特にテークは、そうだったが、その二人を「あんたは、帯剣を抜いて叱責」したのである。
あんたのその怒りが、尋常でないことに私は気づくとともに、「一度解消したはずの疑問が再び頭をもたげてきた」のである。そして、「あんたに対する寒々とした気持ちが沸き起こってきて、すっかり心が冷えて」しまう。
私のこころが、あんたから離れてしまいそうになるのを止めてくれたのは、子供たちであり、とりわけ亡くなった子供が、私たちの対立を和らげてくれたのであるが、やがて戦争が、愛憎のすべてを飲み込んでしまう。
あんたは召集され、私は娘たちを連れてパラオ本島のアイミリーキに避難。私たちは、避難民たちが飢餓に苦しんでいくなかで、オムテロウの家族やテークに助けられて生き延び、あんたも野戦病院に収容されて生き残り、沖縄へ引きあげてくる。
沖縄で三人の男の子が生まれ、一人は病気で一人は自動車事故で失う。そしてあんたが自殺して二十年余たち、私はパラオで育った二人の娘とパラオを知らない末っ子の息子につれられてパラオを再訪、あんたとルビーのこと、サムエル、テーク、オムテロウたちと暮らした日々のこと、そして私が秘密にしていた「サムエルの兄さんたちに乱暴

された」ことを思い出していくのである。

「パラオの青い空」は、パラオで島民との間に起こった二つの大きな出来事を取り上げていた。一つは、あんたとルビーとのこと、そしてあとの一つは私が、「サムエルの兄さんたちに乱暴された」ことである。

「あんた」とルビーのような関係もそうだが、とりわけ「私」が「サムエルの兄さんたちに乱暴された」といった出来事は、衝撃的であった。勿論それは、島人たちによる「乱暴」がなかったということによるのではない。

「チャモロは何を求むるか?—国籍取得請願運動への考察—」[16]の中で、野口正章は、パラオ高等法院長石川音次が「私に云はれた」ことだとして、次のような話を書きとめていた。

こゝに斯ういふ問題があります。それは島民の、謂はゆるエロ犯罪なるものです。それも彼等同志の間のさういふ犯罪ではなくして、時々、島民の男子が、内地人の婦人を襲ふことがある。夜、内地人のうちへ侵入して、寝てゐる婦人を犯さうとしたり、道で襲撃したりする事件が、ちょい〳〵ある。そして、それがなか〳〵、跡を絶たない。

私は、これを、単なるエロ犯罪とは見ないで、一種の不逞行為、不逞思想と見て、徹底的にやつつけてやつてゐるのです。というのが、かういふことをした奴に対する他の島民達の態度を見てゐると、彼等は決して、当該犯人を、悪い奴だひどいことをしやがる、とは思つてゐない。うまくやりやがつた・・・と、どうかすると、一種、それを、羨望したり、英雄視したりするやうな様子さへ見える。

そのために、さういう犯罪が、何時までたつても跡をたゝないで、累犯の奴も出て来れば、また、これを真似する奴も次々に出て来る。

これといふのも、日頃、彼等が、内地人の有形無形の彼等への圧迫に対して、内心、面白からぬ感情をいだいてゐて、―畜生、それならばひとつ、奴等が一番大事にしてゐるところのものを犯してやれ―

さういふ、漠然とした不逞な心理になる結果ではないか。

パラオ高等法院長石川音次の話からわかるとおり、「島民の男子が、内地人の婦人を襲ふ」といった事件は「ちょい〳〵」あって、それが「何時までたつても跡をたゝない」といった状態だったのである。

島民が私を襲ったのは、そのようないわゆる「エロ犯罪」が見られたことを踏まえていたといっていいが、しかし、作品は、サムエルの兄たちの行為を、単なる「エロ犯罪」として描いていたわけではない。そこにはパラオ高等法院長石川音次が指摘していた「内地人の有形無形の彼等への圧迫に」対する「面白からぬ感情」が鬱積していて、それが事件を引き起こす結果になったのだとする見解が取り込まれていた。

「私」が、サムエルの兄たちの「乱暴」を秘密にしたのも、彼等の行為が、「単なるエロ犯罪」とは異なるものであるという思いから出ていただろう。彼等の行為は、統治者からみれば「一種の不逞行為、不逞思想」によるものであったが、被統治者側からすれば、決して「不逞」などというものではなく歴然とした「思想」があっての行為であり、「私」は、その対象にされたのである。

私が襲われたことを訴えれば、必然的に「あんた」とルビーとの関係が白日の下にさらされることになる。そうなると「私」と「あんた」の関係も、修復できないものになっていかざるをえないし、ついには、島人たちとの訣別といった事態を招くことになる。

「私」が、襲われたことを秘密にした由縁であるが、では、「あんた」が、二十年余前、自殺したのは、どういう理

由によるのだろうか。

「私は、何度考えても、あんたの死の原因が分からない。あんたは、何も語らなかったし、遺書も残さなかった。私だけを残して、突然逝ってしまったのだ。何が、あんたを死に向かわせたのだろう」と「私」は考えるが「気にすると、なんでもが、あんたの死に結びつくような気もする。パラオにも、沖縄の地にも、その原因はたくさんあるような気もする」という。

「私」によって反復されるその問いに、明確な答えは与えられてない。その原因は、「公学校」の先生として過ごしたパラオにも、引き揚げてきてからやはり教師として過ごした沖縄にも「たくさんあるような気もする」というだけである。

そして、「もし、パラオに死の原因があるとすれば、この青い空だわ。犯人は、この青い空に違いない」と思う。

表題の「パラオの青い空」は、「私」が「あんた」の自殺の原因を探しあぐねていきついた果てに現れた言葉からとられていたが、無論「あんた」の自殺の原因は「青い空」にあったはずはないのである。

「パラオの青い空」は、公学校の先生として赴任した夫婦と島人たちとの間で起こった出来事を描いていて、それが一つの特質をなしているといえたが、作品そのものが問いかけていたのは、何故あんたは自殺したのかということにあった。

「あんた」の自殺の原因は、端的に言えば統治者と被統治者との関係が退っ引きならないかたちで迫い被さってきたことにあったであろう。丁度「あんた」がパラオにわたり「公学校」に勤めていた時期を思い起こさせるような情況が、沖縄を覆い始めていたことで、「あんた」は、沖縄が、パラオ化しつつあることに絶望し始めていたのではなかろうか。

「あんた」が、パラオに渡ったのと同じ年の昭和十六年、石川達三もパラオを訪れていた。石川は六月十七日、南洋神社に参拝した戻り、パラオ公学校を参観、そこで高等科の女生徒たちが、愛国行進曲、軍人廣瀬中佐、児島高徳といった歌を歌っているのを聞いて、「日本の伝統を感じ得ないこのカナカの娘たちにとつて、八紘一宇の精神や一死報国の観念が理解される筈はないのだ。美しい鸚鵡の合唱であつた」といい、さらにその後、唱歌帳に収録されている歌が歌われたのを聞いて、「この歌を作つた人が誰であるか、私は知らない。たゞこの作者の支配階級意識に驚嘆した。そしてこの歌を嬉々として歌ふ少女たちを涙なくしては考へることはできなかつた[17]」と書いていた。

六月十七日の石川の記述を読んで、石上正夫は次のように書いている[18]。

> 故郷を遠く離れて南洋の島々に渡り、恵まれない条件のもとで熱心に教育にうちこんだ教師たちの善意が、たしかなものであればあるほど、南洋群島の現代史の中で悲しい存在とならざるを得ない。
>
> 大日本帝国という巨大な体制のもとで、教える側の善意と教えられる側の善意とが結びあい、天皇のためにのみ存在を許される皇民化教育が、現地の人々の心を支配する結果を招いた。たとえそれが善意であっても、心理や真実に照らして認めることのできないものは、歴史の中で厳しく裁かれるであろう。

石川がパラオに渡ったその年の十二月八日、真珠湾の奇襲があって、日米戦が勃発。「あんた」の公学校でも、愛国行進曲や軍人廣瀬中佐、そして児島高徳といった歌が歌われ、一段と「八紘一宇の精神や一死報国の観念」をすり込んでいく教育が中心になっていったに違いない。「あんた」はその中で、島人たちの子弟の教育に励んだはずなのである。

そして戦争になり、餓死者が蹴出する中で運良く生き延び、沖縄に引き揚げたのち、再び「あんた」は教育に携わっていく。米軍占領下の教育を経て、日本に返還された後の教育が、「『人間の力を越えたものに対する畏敬の念をもつ』『日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に尽くす』人間の育成や、特別活動の儀式的行事で『祝日などの意義を理解させるとともに、国旗を掲揚し、国家を斉唱させることが望ましい』『君が代』を音楽の時間にも共通教材に準じて各学年で歌わせるなど天皇を畏敬する心情と国家意識を子どもたちの中に培って日本人としてのまとまりを強調する傾向が強くなっている」[19]といわれるようになるなかで、「あんた」は、かつて委任統治下にあった土地で行った教育を思い起こさざるを得なったはずである。

本来自由であるべき教育が、「現地の人々の心を支配する結果を招いた」ことを、嫌でも思い起こさざるをえないような情況が、施政権返還後の沖縄の教育界を覆い始めていたことで、「あんた」の「優しい心」は、閉ざされていく。

「パラオの青い空」は、占領下での教育にはじまり、施政権返還後になっていよいよ窮わになっていく植民地的な教育環境が、かつて委任統治下の群島で行われていた教育に類似しつつあることに絶望し、自死した教師の物語でもあったといっていいのである。

4、南洋引き揚げ者たちの戦後「セカレーリア」

「パラオの青い空」の「あんた」の死は、あと一つ、南洋から引き揚げてきた人々の戦後が、決して生やさしいものでなかったことをよく物語っていたといっていいだろう。そしてそれは決して「あんた」の世代だけでなく、あんたの世代の子供たちにとってもそうだったといえそうである。

南洋から引き揚げてきた家族、とりわけその子供たちは、引き揚げ先の村落でどのような日々を送ったのか、その

一端をかいま見させてくれる作品があった。樹乃タルオの「セカレーリア」[20]である。

作品は、「僕」が、カニのいる「泥の穴の中へ手を差し入れていく」夢からはじまる。沖縄に引き揚げてきた後も夢に出てくるそのカニのことが、「地方紙の片隅」にカラー写真で紹介されているのを見て、僕は「懐かしい感慨」にふける。

カニの写真は、「四歳の頃の」僕のこと、「セイコノネエ」のことなど、「キチー村」での出来事を思い起こさせる。キチー村での「楽園であった」日々は、しかし「東の間の夢」のごとくで、程なくして「それぞれの家族がテーアンの第三農場へ入植して」いくことになる。そこは「ポナペ島の中でも町のコロニヤや開けたマタラニームからすればなお最奥地の未開」の地で、「開拓地のどこでも、家族総出で働く光景が毎日のように」見られた。開拓地は、土地が肥沃で、サツマイモにしても「子供の頭ほどにもバカデカク」て、小指ほどの内に掘り出して食べていたという貧農の子であった父にとっては「たまげるほどのできであったにちがいない」と、僕は思う。

昭和一八年（一九四三年）十月頃になるとポナペ島にも日本軍が配備されてくるようになり、戦時体制が敷かれていく。[21] 一九年（四四年）二月には、空襲でコロニヤの街が全滅。五月ごろから大型戦闘機の大挙飛来、艦隊の出現、砲撃等があって、船舶輸送が途絶え、生活用品が底をつきはじめる。男たちが「召集」されたあと、女たちの共同生活が始まり、幼い子どもたちを抱えての避難訓練が行われ、やがて避難生活が日常化する。戦況はさらに悪化し、「カナカ族の不穏な動き」が伝えられたりしているうちに日本兵から「終戦の知らせ」が入る。

作品は、前編と後編とに分けられる。キチー村からテーアンの村へ移動し、敗戦でポナペを引き揚げるまでの日々を描いた箇所が前編にあたる。後編では帰還した後の沖縄での日々が描かれていく。

一九四六年の南洋引き揚げ者は、厚生省の記録では二万人余。その内ポナペ出身者は七千人余となっているようである。

中城久場崎に上陸。たそがれ時であった。いくつか並んでいるテントの一つに仮泊。翌日、陽もだいぶ高くなってから収容所インヌミへの移動が始まる。引揚げ者たちの長い列が続いていた。僕たちの家族はリュックを背負い、柳行李を持ったお父を先頭に、一歳の弟を背に、二女の手を引いたお母が続き、すぐ下の妹、そして僕であった。（中略）

覚えているのは夏の暑い日盛りの中を歩いていたこと。隠れる陰さえない荒蕪地だった。見晴るかすあっけらかん。緑を剥かれた赤裸の丘陵。白い石粉の道路。時々アメリカの軍用トラックやジープが側を通っていった。

僕たちが上陸し、翌日移動して行ったインヌミ収容所は「四六年七月一日に公式にオープンするのであるが、すでに前年の一〇月には南洋その他の地域から引揚者を受け入れて」[22]いたと言われる。僕の記憶が「夏の暑い日盛りの中を歩いていた」ことからして、僕たち家族がインヌミ収容所に入ったのは、同所が「公式にオープン」したあとのことだったに違いないが、勿論そこは「仮の宿り」であった。

インヌミという収容所のテント小屋がまずは仮の宿り。インヌミから安慶田へ、安慶田から読谷村の波平へ、波平からはお父の出自、親志村へ——旅は終わるはずであった。

否、否、元の住所へ戻ることは罷りならんというお達し。そこは現嘉手納弾薬庫の一部となっているところで立ち入ることさえ禁止されているところであった。やむなく、喜名村と座喜味村の間に村ごとの借地。旅の

宿りの終わることはなかった。

沖縄の戦後史は「収容所の柵の中から出発した」といわれるように、すべてが収容所の中から始まっていく。そして、四五年の十月頃になると、収容所から元の居住地への移動が認められるようになるが、「すべての人たちが、すぐに元の居住地へ帰れたわけではなく、元の市町村民が一団となって、米軍の指定する土地を転々とさせられた例も少なくない。旧居住地への移動は、一九四六年のなかばにはだいたい終わるが、一九四七年の後半までかかった市町村もある。もちろん、軍施設とその周辺への立ち入りは禁止されていた[23]」という。

僕たちの家族は、転々とさせられただけでなく、父の出生地が、立ち入りを禁止された土地になっていたことで、結局「借地」に入ることになるわけだが、住むところさえ決められないありさまは、南洋から引き揚げてきた後の生活が、決して楽ではなかったことを指し示していた。

ポナペから引き揚げてきた人々の口から「もしかなうなら、もう一度南洋へ戻りたい」という言葉がもれてくるのも、「僕自身もポナペの夢ばかり見ていることが多かった」というのも、まちがいなく、落ち着いた先での生活が楽でなかったことによるだろう。それは、ポナペからの引揚者たちと、そうでない者たちとの間に、絶対的な隔たりができていたことによるが、さらに、ポナペからの引揚者たちが、肩をすくめざるを得ない大きな出来事が二つあった。

その一つは「戦争体験の悲惨さにおいて」であり、あとの一つが「痩せ地に忍耐することにおいて」である。前者について言えば、ポナペ帰りが、空襲だけの体験で終わっていて、例えばサイパンやテニアンといった「玉砕地」からの引き揚げ者たちとは異なるといった点でもそうだったし、後者に関して言えば、ポナペの開拓地が沖縄と比べものにならないほど肥沃であったということでもそうだった。

僕たちは「南洋帰り」と言われ、「南洋帰りは」と束ねられ、「南洋ボケ」「楽園喪失者」と言われることもあった。そしてそれは、全く的外れな評言でもなかったが、「当の大人たちは自分たちがどれほどの皮肉、からかい、嘲笑に囲まれていることか、子供ほどには知らなかったのではなかったか」と、思わせるものがあった。

僕に関して言えば、僕は、一九四八年四月、開校された宮名小学校の三年生になっていた。そこで上級生に「ことばをからかわれた」ことから喧嘩になる。僕は、あっというまに「押し倒されて組み敷かれ」、相手が「ワビ（降参）か？」と言うのに、死んでも「ワビ」とは言うまいと思う。

僕はこの時からヤマトグチを捨て、ウチナーグチを覚えることにした。そしてポナペへ退行することを自分に禁じた。このことは弟や妹たちにも押しつけられた。例えばそれまで「お兄さん」と呼んでいたのを「カズ」に直させる。ヤマトグチが出ると即座に叱りつける。すっかりいやな兄だった。そのうちポナペの話題そのものが我が家から消えていた。

道は過剰適応しかなかったのだ。そのいびつな緊張を生きることが僕の戦後と言えば言えよう。そしてポナペはとうとう僕自身にとって恥部となってしまった。

僕が「ヤマトグチを捨て、ウチナーグチを覚えることにした」のは、言うまでもなく、生徒たちが「ウチナーグチ」を日常語としていたことによる。僕は、両親がポナペに移住した後生まれた、いわゆるポナペ生まれなのかどうか明らかにされてないが、ポナペ二世であれ何であれ、沖縄を出自とする移民の子で、それが、「ウチナーグチ」を話せないということは、土地の子供たちにとってよそ者であり、許し難い存在であったといっていいだろう。

移民の子どもたちが、言葉の問題で難渋したのは、よく知られている。例えば、僕と同じく「三年生」のとき移民した時のことを書いた次のようなのがある。[24]

私が八歳のときでしたが、親父の呼び寄せで母と姉と私の三人がサイパンに渡ったんです。ちょうど私が小学校三年生の夏休みに行きましたから、二学期からはサイパンの学校に転校しています。

転校して困ったのは、まず言葉でした。沖縄にいるときは方言しか使っていませんから、標準語がわからないんです。サイパンではみんな標準語しか使いませんから、私は話すことも聞くこともできず、一学期間オシになって黙っていました。当初「自分だけが話せないんだ」と思っていたのですが、驚いたことに、沖縄から移民していった子どもたちは、みんな同じように話せなかったんです。

右の引用からわかるように「サイパンではみんな標準語」であった。そしてそれは、他の移民地でも同様であったし、移民していく子たちは、多かれ少なかれ、「標準語がわからない」ために、悩まされたのである。そして移民地から沖縄に帰ってきた子は、今度は逆に「ウチナーグチ」がわからないため、難癖をつけられることになる。

「ウチナーグチ」をめぐる事件は、移民地からの引揚者であることを強く意識させずにはおかなかったが、僕は、上陸した翌日、久場崎からインヌミ収容所に向かって行くとき、すでにこころを傷つけられていた。

僕たちの行列が、「どこかの村らしきところを」通過した時、焼け残った民家からぞろぞろ大人や子どもたちが出てきて、僕たちを見ていたのだが、その最前列にいた子が「アネ、アカパンツ、アカパンツ」と、妹を指してはやしたてたのである。母は「この辺はまだヒラケテいなかったんだね」と五歳の娘をかばったが、僕にとっては「初めて

他者の眼に出会った瞬間であった」と思う。

五歳の娘のパンツをみて「アカパンツ」とはやしたてるような子がいたのは、確かに母が言うようにそこが「まだヒラケテいなかった」ことによるとはいえ、そこには間違いなく僕が感じたように「他者の眼」があった。

上陸して間もなく感じた「他者の眼」も、ヤマトグチを葬り去るといった「過剰適応」も沖縄に引き揚げてきた子供たちが、多かれ少なかれ味わわざるをえなかった現実であったのである。

「セカレーリア」は、引き揚げてきて「すっかりいやな兄」になったばかりか、「楽園」であった移民地を「恥部」として秘してしまうという、いわば楽園喪失の物語になっていたが、そこにはさらに大きな喪失の物語が秘められていた。

「セイコノネエ」の物語である。

新聞に掲載されたカニの写真を見て、最初に「このカニのことを思い出す度に僕には一緒についてくる人がいる。セイコノネエである。その人のことを僕は、セイコノネエ、セイコノネエと呼んで追いかけていた」として登場して来る人、干潟でチガニ、コメツキガニ、シオマネキなどを追いかけ泥んこになったのを、二人とも裸にされて水を浴びせられたこともあったのに、「急に姉さんらしくなって、近よりがたくなっていた」セイコノネエ、「教科書を読んでもらったり、時には文字の書き方まで教えてもらった」セイコノネエ、「カズちゃん、大きくなったら私をお嫁さんにしてくれる?」といったセイコノネエ、引き揚げて来て「中学二年」になった秋ごろ、「セイコノネエが父親に連れられて訪ねてきたこと」、母が「今まであんたの帰りを待っていたのよ。まだバス停の辺りじゃないかしら」といい、父が「セイチャンはすっかりアンマージュクイ(大人の体つき)してきた。そろそろお嫁に行ける頃だな」というのを聞いて、僕は、水汲みにかこつけて、裏山に駆け上り、バス停のあたりを見るが、すでに終バスの時間も過

ぎていて、バス停からいなくなっていたセイコノネエ。

「セカレーリア」は、南洋引揚者の楽園喪失とともに、セイコノネエへのほのかな思慕と思春期の過剰な心身の反応とをイメージ豊かに描いていた。題名となったその言葉は、楽園との決別を告げるものであっただけでなく、セイコノネエへの惜別の言葉でもあったのである。

5、南洋物語の結末「ヌジファ」

敗戦によって、南洋移民はそれぞれの島から引き揚げてくる。久場崎に上陸し、ＤＤＴで体中をまぶされ、インヌミヤードゥイに収容された後、それぞれの出生地にもどり、新しい生活を始めていく。彼らの南洋での生活は引き揚げで終わったのであるが、南洋との関係が断ち切られたわけではなかった。

南洋から引き揚げてきた人々は、生活が落ち着くと南洋帰還者会を発足させ、引き揚げ万端に関わる保障問題の折衝を行うようになり、その過程で各島帰還者会が結成されるようになる。[25] やがて各島帰還者会は、かつて住んでいた島への慰霊・友好訪問を始めていくが、それとは別に家族による訪問も見られるようになる。

「ヌジファ」は、パラオから引き揚げてきた家族が、曾て住んでいた地で亡くした長男の霊魂を沖縄に招くため、パラオを訪れるというものである。

「ヌジファ？　今、ヌジファって言ったの？」

「そう、ヌジファよ」

「ヌジファって、何？」

正樹は、思わず聞き返した。

「ヌジファって言うのはね、その土地に縛られているマブイを解き放つことだって。俊一のマブイはね、まだ、パラオに残っていて、成仏できずに彷徨(さまよ)っているんだって。それを郷里の先祖のもとへ案内して、成仏させようというわけよ。それを、ヌジファって言うんだって。死んだ人を、忘れてはいけませんよって」

「ヌジファ」の書き出しである。

母親が死んで、兄の俊夫と姉の頼子そして美登子の三人が、「マブイワカシのウガンをしてもらうためにユタの所へ行った」ところ、パラオで亡くなった長男俊一のマブイがまだ島にあって、その「マブイを解き放つ」ために「ヌジファだとか、チャッチウシクミだとかいう」儀式を執り行う必要があるとの「ハンジ」が出たというのである。

頼子からその話を聞いた正樹は、三年前、皆でパラオへ行って、俊一のために焼香もしたのではないかと反問すると、頼子は、それは旅行で行ったのであって、「ちゃんとオガミ(供養)には行っていない」ので「俊一のマブイは、まだ彷徨って」いるとユタに言われたと答える。正樹は、納得のいかないものを感じたが、頼子はまた、「俊夫が病気になって入院したり、体調が優れないのは、俊一のマブイがチャッチウシクミをしていることを知らせているのに、いつまでも皆が気づかないから苛立っている」ともユタが話したこと、そのため俊夫の嫁がひどく気にして「是非、パラオにウガンに行こうと言っている」という。

「二人の姉と俊夫夫婦、そして正樹」がユタの天願キヨをつれて「パラオへ出掛けたのは、母の一年忌が終わり、新しい年を迎えた夏の始め」である。

パラオ国際空港へ着いたのは夜、迎えに来たライトバンに揺られてホテルに向かう途中、頼子が、以前来た時、ア

ルツハイマーを患い、記憶を失っていた母が、「確か、この辺りから」「だれかが乗っていると言い始めたんです」と天願キヨに言うと、キヨは「そうですね、やっぱり、それは長男のマブイだったかもしれませんね。もう、たくさんのマブイが周りには来ていますよ・・・・」と、両手を合わせて、「何事かをつぶやき始め」る。

「ヌジファのウガン」は、南洋神社でとり行われた。長いウガンになったのは、「他のマブイに邪魔され」たことによると、天願キヨはいい、「ここにはね、一緒に連れていってもらいたがっているマブイがたくさんいるよ。みんな、成仏出来ないでいる。可哀想に、みんな沖縄に帰りたがっているよ。（中略）みんな連れて帰りたいね・・・・」とつぶやく。

「マブイは、ついてきたんでしょうね・・・・」

通路を隔てて隣の席で言葉を交わしている俊夫夫婦の話し声が、かすかに聞こえてきた。

「さあね・・・・。ついてきていると信じるだけさ・・・・」

パラオをとび立った飛行機の中での会話である。

「ヌジファ」は、死んだ長男俊一の「マブイ」を迎えにユタの女性を伴ってパラオにいった話だけが書かれていたわけではない。そこには、死んだ父親のこと、アルツハイマー病になった母親のこと、正樹の離婚のこと、天願キヨのこと、パラオでの生活のこと、戦争中のことそして前回の訪問のことなど、パラオを引き揚げてきた家族にちなむ全般が書かれているが、作品の焦点は、題名からわかる通り「ヌジファ」にあった。

ヌジファについては、「我々は各人が沖縄の風習の「ヌジファ」（死んだ地にあるその人の魂を移すこと）をしてま

わりました。私の身内だけでも二五名分の御願をしました[26]」といったサイパンでの出来事を語った証言などがあるように、南洋を引き揚げてくるときそれぞれ行っていただけでなく、戦後、死者を出した家族は、ユタを伴い、「マブイ」を迎えに行っていたのである。

ヌジファがどういうものなのかについては作品の最初にその説明がなされていたが、民間信仰の研究者である桜井徳太郎によれば「居住地以外の所で客死したり戦争や事故などにより非業の死をとげたばあい、死場所に憑着する当該死者の霊魂を抜きとり実家の墓地まで導き寄せて埋葬する巫俗儀礼[27]」だという。南洋引揚者たちの多くが、戦後、曾て住んでいた地へ足を運んだのは、南洋での死を「非業の死」と考えたことによるのである。

ヌジファがすめば、南洋に行く必要はなくなる。正樹がパラオを飛び立った飛行機のなかから眼下に広がる「白い砂浜と、椰子の茂った」幾つもの入江を眼にしながら「もう二度と来ることはないだろう」と思ったのは、ヌジファによって、南洋との関係は終わったと思ったからである。

ヌジファの儀式は、南洋移民の物語を締めくくるにあたってこれ以上ない指標であった。「ヌジファ」は、その意味で、南洋小説の終わりに位置するものであったといっていいだろう。

おわりに

南洋群島の邦人人口の大半をしめた沖縄の人たちは、「南洋興発」の移民募集に応じて海を渡り、農業や漁業その他の職業に携わっていったが、中には、そうでない人たちもいた。儀間の『テニアンの瞳』、金城の「少年と異端者」は、たまたま、そのような人々を描いていて、それだけに異色の作品となっていた。

大城の「パラオの青い空」も、公学校の教師という沖縄からの移民としては数少ない職業に携わった人物を登場さ

せていただけでなく、「島民」たちとの関係を描き込んでいたことでも異色の作品となっていたし、「ヌジファ」もまた移民地で死んだ者の魂を成仏、帰還させるという、引き揚げてきた者たちにとってもっとも気がかりな問題を扱った異色の作品になっていた。

樹乃の「セカレーリア」は、「少年と異端者」と同じく移民地における少年を描いていたが、それだけでなく引き揚げて来た後の、引き揚げて来た土地での順応に苦しむ心身を剔抉していてやはり異色の作品となっていた。

沖縄の書き手たちの南洋移民を書いた作品は僅かなものである。しかし、そこには体験談とは異なるものが取り出されていた。それぞれの作品には、そのような顕著な点が見られたが、もちろんそのようなことだけが書かれていたわけではない。

儀間比呂志の『テニアンの瞳』は、その副題が「南洋いくさ物語」となっていた。儀間が副題を「南洋いくさ物語」としたのは、テニアンが、サイパンとともに、住民を巻き込んでの玉砕戦になった地であったということによるだろうが、儀間には、そこでどうしても書いておきたいことがあったのである。

杉浦佐助の最後についてである。儀間は、それを杉浦の追悼・供養のために書いたにちがいないのである。

儀間の意図を酌めば、後編をぬかしてはいけないだろうが、ここで見ていこうとしたのは、作品の全体についてではなかった。そしてそれは、儀間の作品に限らない。金城正明の『少年と異端者』についてもいえることである。金城の作品も、サイパンでの少年期の生活だけを描いていたのではない。僅かだとはいえ、「星霜移ること四十一年。善吉は、休日の午後の一時(ひととき)を太良への回想ですごしている」として、太良のその後についても触れていたのである。

作品の全体に触れてないということで言えば樹乃タルオ、大城貞俊の作品に関しても、そうである。ポナペの戦いについても、パラオの戦いについても一切言及してない。

南洋移民を扱った作品を見ていく上で、戦争を落とすことはできない。そのことを承知の上で、ここでは全くふれてない。それどころか、たとえば金城正明の労作「サイパンの桜」や、その他宮城信昇の『サイパンの戦いと少年』といった作品等をとりあげていない。

そのような大きな欠落があるが、焦点を絞ったことで、これまで数多く語られてきた「南洋興発」移民とは異なる移民たちがいたことや、南洋から引き揚げてきた者たちの戦後が少しは見えてきたのではないかと思う。

注

1 石川友紀「第四節　一、南洋群島」『沖縄県史7　移民』、一九七四年三月三十一日　沖縄県教育委員会、石川が「別の資料によると」としてあげている一つに『自一九四五年至一九五五年　琉球資料　第四集社会編1』があり、そこに「一九四二年（昭和十七年）日本人七一六四七人の内沖縄県人が約八割を占め五六、九二七人であった」とある。

2 「サイパン製糖所の設立」の中の「南洋企業の最雄間の一つ」「勇躍する移民」の項、松江春次『南洋開拓拾年誌』昭和七年十二月二十日　南洋興発株式会社。

3 「南洋興発株式会社」の項、『南方拓殖の全貌　南洋群島案内　付外南洋大観』昭和十四年四月一日　海外研究所。

4 二〇〇八年五月十八日　海風社。

5 岡谷公二「「南洋群島」三代の系譜　土方久功、杉浦佐助、儀間比呂志」『美術家たちの「南洋群島」』二〇〇八年四月十二日　東京新聞。

6 「新連載　渡嘉敷守良翁遺稿　わが自叙伝」『青い海』一九七六年第六巻第一号～第六巻第五号。

7 大城学は「渡嘉敷守良は一九三二年にテニアン島に巡業に出ている」と書いている。「第一一章　移民・出稼ぎと沖縄の芸能」、

大城学編『琉球・沖縄の芸能　その継承と世界へ拓く研究』彩流社　二〇一二年三月三十一日。仲間恵子「第六章　関西における沖縄芸能―普久原朝喜と太平丸福レコード」には、「平良良勝一座の伊集亀千代、比嘉良頌、野村安信は、一九三九年一〇月、『南洋在住県人同胞の御招待に依り三ケ月の遠征興行を終り』沖縄へ帰る途中、大阪の戎座の舞台に立っている」という文章が見られる。

8 小浜司『島唄レコード　百花繚乱――嘉手苅林昌とその時代』ボーダー新書　二〇〇九年一〇月五日。小浜司『島唄を歩く―』琉球新報社　二〇一四年六月二七日。

9 『サイパンの桜』（一九八四年三月二十日　近代文芸社）所収の一編。

10 『サイパン会誌　想い出のサイパン』サイパン会　昭和六十一年六月二十三日。

11 「第七章、海の生命線」『日本領サイパン島の一万日』岩波書店　二〇〇五年八月四日。

12 大城貞俊作品集上『島影　慶良間や見いゆしが』（人文書館　二〇一三年十二月十日）所収。

13 南洋庁『南洋庁施政十年史』昭和七年七月一日。

14 南洋庁『昭和十八年版　南洋群島要覧』昭和十八年十二月二十八日。

15 南洋庁内務部企画課『第九回　南洋庁統計年鑑　昭和十四年』昭和十六年八月。

16 『南洋群島』第四巻第十一号　南洋群島文化協会　昭和十三年十一月一日。

17 「群島日誌」「赤虫島日誌」（東京八雲書店　昭和十八年五月十五日）所収。

18 『日本人よ忘るなかれ　南洋の民と皇国教育』大月書店一九八三年九月二十二日。

19 福地曠昭『教育戦後史開封―沖縄の教育運動を徹底検証する―』閣文社　一九九五年六月二十三日。

20 『二月の砂嘴へ』（非世界発行所　二〇一〇年十二月一日）所収。「セカレーリア」は、作者の記憶違いか。マンドーラ大山さんの

「日本人の血を大事にしたい」（『太平洋の楽園　ポナペ会誌　沖縄ポナペ十周年記念号』平成七年八月一日）に「沖縄のポナペ会の皆さま　カセレリア！」とある。また彼女は「ポナペ語について少し話してみたいと思います」として「皆様がよく使われるカセレリアとはハワイのアロハーと同じで子供から大人まで誰にでも共通の挨拶用語です」と紹介していた。

21 秋田武彦『南海の不沈艦　ポナペ島戦記』恒文社　一九八一年二月二十一日。

22 伊敷勝実「インヌミヤードゥイについて」『インヌミから　50年目の証言』沖縄市企画部平和文化振興課　一九九五年九月七日。

23 中野好夫　新崎盛暉著『沖縄問題二十年』岩波書店　一九六五年六月二十一日。

24 伊礼真栄「ジーパンかかえてサイパンからインヌミへ」『インヌミから　50年目の証言』所収。

25 今泉裕美子「南洋群島引揚者の団体形成とその活動―日本の敗戦直後を中心にして」『史料編集室紀要』第三〇号　沖縄県教育委員会　二〇〇五年。

26 長堂松次郎「沖縄爆撃の強制労働」『沖縄県史10　沖縄戦記録2』一九七四年三月三十一日。

27 「ヌジファ」『沖縄大百科　下』沖縄タイムス社　一九八三年五月三十日。